

資料 指導過程

段階	学習活動・内容	時間	形態	教師の主なはならかきかけ	予想される児童の反応	指導上の留意点※ 評価
感	1. かぼちゃのスケッチをOHPで拡大して小さな船のスケッチと合わせて見て、何に見えるか話し合う 2. 学習課題をつかむ。 どこかぼ島の人けん話をつくらう	5	斉	これは、〇〇君のかぼちゃのスケッチです。これを大きくして見ます。 これは〇〇君の船のスケッチです。合わせるように見せるでしょう。 音もいれてみます。 今日は、みんなの作った船で、かぼちゃの島「どこかぼ島」の探検に行ってもらいます。 ・課題を板書する。	「大きい」 「すげえ」 「？」 「島みたい」 「海だ」 「えー」 「うそー」 「やったー」	・教師の作った絵でなく自分で描いた絵を使うことにより、実際にスケッチが描かざることを知り、自信を持てること。 ・色を自由に海の感じを出す。(OHPで) ・効果音「波」のレコードを流し、雰囲気作りをし発想を豊かにさせる。
構	3. 島と海の様子について思い浮かべる (1) 島には何をしようとしたのか。 (2) どんな島にしたいか。 (3) どんな海にしたいか。 (4) どんな船にしたいか。 (5) 他に付け足したいことはあるか。 4. 思い描いたことを、カードに記入する。	15	斉	さあ、目をつぶって、頭に絵を描きましょう。 ・島には何をしようとしたのか。 ・どんな島にしたいですか。 ① 季節はいつですか。 ② 昼ですか、夜ですか。 ③ どんな形をしていますか。 ④ 島は近くに見えますか、遠くに見えますか。 ⑤ 島には何がのびているか。 ⑥ どんな生き物がのびるか。 ・どんな海にしたいですか。 ① 静かな海ですか、荒れた海ですか。 ② 海には、どんな生き物がのびますか。 ③ 空は、どんな空ですか。 ④ 風はどんな風ですか。 ・どんな船にしたいですか。 ① 船はどんな形ですか。 ② 船にはどんな人が乗っていますか。 ③ 船に乗っている人は何をしていますか。 ・他に付け足したいことがあるか。 ・考えたことをカードに書いてみましょう。	・頭の中で自分の絵にしたい画像を思い描く。 ・遊び、探検、空がし、鬼退治等 ① 春、夏、秋、冬 ② 昼、夜 ③ 図工ノートに描く。 ④ 遠く、近く ⑤ 木、草花、山、川 ⑥ 蛇、虫、鳥、怪獣 ① 静かな海、荒れた海 ② 鯨、イルカ、鯨 ③ 晴れ、雨、曇り、雪 ④ 穏やか、激しい ① 図工ノートに描く。 ② 自分、友達、家族等 ③ 遊んでいる、働いている、波と戦っている ・自由にお話を広げる ・カードに記入する	・「波」のレコードを聞かせる。 ・目的意識をはっきりさせ、服装、物を明確に。 ・何をしようとしたか、何をしないか、何をしようとしたか、ポイントを押しさす細い発問をし、描くものを明確にさせる。 ・空や波など周りの様子を明確にさせる。 ・自分の作った船から自由に想像を膨らませて、絵に合った船にしたいものにする。 ※描きたいものがはっきり押さえられたか。 ・構図の参考にすること。 ・あいまいな空想でなく描きたいことを明確にさせるために、カードに記入させる。 ・発想が乏しい児童には、事前調査書を見てその子にあったヒントを与えるようにする。
表	5. 思い描いたことを絵で表現する。	20	個	・今のカードを参考に、図工ノートに鉛筆で書いてみましょう。	・図工ノートにアイデアスケッチをする。	・カードに記入したポイントを押しさすか机周巡視をして確認し、うまく表現できない児童には、カードと事前調査書を参考に、助言指導をする。 ※主題にあったアイデアスケッチになったか
鑑賞	6. アイデアスケッチを発表する。 7. 次の予告を聞く。	5	斉	・どんなお話の場面にしたか見てみましょう。 ・この次は、島や船を画面にどう入れたら良いか話し合います。	・何人かのスケッチを見る。	・種類の違う場合のものを見せる。

4 水彩絵の具の混色が正しく理解できていない児童が多かったため、三原色をもとに十二色を作らせた。難しいかと思われたが、少

3 OHPによる船と島、参考作品の見せ方などが適当でなかったためか、類似の構図がでてきた。(本時では構図指導のし過ぎ)しかし、予定の次時での構図指導でうまく修正できた。

2 水彩色の具の混色が正しく理解できていない児童が多かったため、三原色をもとに十二色を作らせた。難しいかと思われたが、少

5 水を含ませた手製の和紙の上では、パレットの上では味わえない混色(にじみ、ぼかし)のできることに感動していた。

6 「心」で絵を描かせるために、導入の前にも十分に時間をかけ、意識を高めるように様々な方法で指導し、関心を持たせるようにした結果、のびのびとした絵になったようだ。

7 一単位時間内に順番で必ず一声かけるようにしながら、児童一人一人の良いところをほめるようにしてきた結果、自信の無かった児童や、絶望感を抱いていた児童でも、喜んで自信を持って取り組めるようになった。

8 現実のままでは描写しにくい場面でのVTR使用によるクロッキーはかなりの効果的だった。(重さ40kgのかぼちゃを持つ等)

9 今回、障子紙をしわくちやにし

10 児童が喜んで絵を描けるのは、描くときに何の抵抗もないときである。描かせるのではなく、描きたくなるように仕向けるのが教師の務めである。そのためには、題材及び画材、用具等の教材研究はいうまでもないが、「導入の工夫」こそが最も大切なことといえよう。

指導過程は問題であるが、児童の描きたいという欲求を満たしてやるためには、発達段階や個人差を考慮しながら、個に応じた適切なアドバイスが必ず必要である。そこで忘れてならないのは、「児童は自分が下手な絵だと思っても一生懸命描いた絵が、教師や友達に認められれば満足し自信を持ち、嫌いな絵も好きになる」ということである。そして、その喜びや自信は、他教科や普段の生活にも良い影響を与えてくれるようだ。

今後、どのような題材についても教材研究を十分に行い、一人一人を大切にしながら、個に応じた適切な助言指導及び喜びを与えられるような励ましを続けていきたい。